

『北欧の爽やかな風に吹かれない！』

“世界最大のゾグネフィヨルドと北欧3都市爽快紀行8日間”

〔近畿日本ツーリスト 熟年の旅〕

出発 平成14年8月11日（日）

帰国 平成14年8月19日（日）

添乗員：福島直子さん

8月11日（日） 晴れ

9時55分に第2ターミナルに集合ということで、日暮里発8時35分のスカイライナーに乗って、ほぼオンタイムで到着した。夏休みのピークということで、成田はたいそう混雑していた。今回は1人参加が僕を含めて3名、計17名のパーティーであったが、昨年のアフリカ旅行で知り合った磯部先生とご一緒することになったので、まったくの1人ではなく、ずいぶんと気楽であった。

添乗員（TD）は福島直子さん。可愛らしくて、知的な感じの素敵な方であった。

SK-984便はほぼ定刻の11時55分に離陸し、一路コペンハーゲンを目指した。隣席は眼科の女医さんで、内外のドクター・ツアーで参加されているとのことであった。初めに磯部先生に紹介されたのがそのツアーであり、2ヶ所の老健施設見学があって勉強になるかなとも思ったが、海外に行っても老健施設に行くのもちょっと嫌だし、その分観光時間が少なくなるし、値段もバカ高いし、ということで近ツリのこのツアーにしたという経緯があった。そんなこともあって、いろいろお話ししたところ、ご主人は医科歯科の難治研の教授をされていて、現在はリタイアされ、今回、ご主人がご一緒でないのは“犬の世話をしている”からとのことであった。難治研には後輩もいて、また、若い時分にナイジェリアで生活した話なども聞かせてくれ、退屈しないで過ごせた。

現地時間の16時15分にコペンハーゲンに到着後、17時05分に再集合して、SK-420便に乗り込み、ほぼ定刻通り（17時25分）に離陸した。窓外は薄い雲に覆われ、景色はあまり見えなかった。18時40分にストックホルム着。人口883万人の国の玄関というには、何となくカントリーっぽく感じたが、北国らしく針葉樹に囲まれており、雰囲気はまあまあであった。また、日本のクソ暑さに辟易させられていたので、カラッとした乾いた空気がありがたかった。5,000円を両替した後、19時20分、まだまだ眩しい陽射しを受けながらバスに乗り込み市街へと向かった。運転手はボーさんで、観光に関する福島さんからの一通りの説明に続いて、ガイド（アシスタント）の伊藤さんから天候、気温、通貨、公衆トイレ、付加価値税、お土産などの説明があった。この時期は朝5時から夜9時頃まで明るいということであった。また、治安については、観光シーズ

ンなので特にホテルのロビーでの置き引きに注意するよう強調していた。

日曜の夜の 20 時近くだというのに道路は比較的混雑しており、車窓から見える ‘NOKIA’ の広告の黄色と紫の気球が、湿気の少ない爽やかな空気に美しく浮かんでいた。ほぼ 20 時ジャストにホテル（ファーストアマランテン）に到着した。おにぎりとうーロン茶で軽い夕食を済ませてから入浴し、やっと落ち着いた。22 時頃ころには眠ったが、7 時間の時差と暑さのせい、何度も目覚めてしまった。

8 月 12 日（月） 晴れ

6 時過ぎには起きてしまい、7 時少し前に市庁舎まで 1 人で散歩に出かけた。ジョギングしている人も多く、自転車専用道路をハイスピードで走っている自転車も軽快感があり、爽やかな夏の朝、といった感じであった。また、市庁舎の 3 つの王冠が朝日に美しく輝いているのが印象的で、きらめく湖水に涼しさも感じられた。シャッターを押してもらった地元の若い女性もジョギング途中であったが、メーラレン湖とサルトシェーン湖の間は水位を補正するために運河になっていること、対岸のセーデルマイム島の湖岸には芸術家たちが住んでいるブロックがあること、2 年前に天皇陛下が訪れた時に船で市庁舎に乗りつけたが、その出航の際に船のロープがほどけないというアクシデントがあったことなどを話してくれた。



8 時からの朝食後、9 時半より市内観光が開始した。さすがに“熟年の旅”というだけあって、随分とゆっくりしたスケジュールであった。運転手はペーテルさん、ガイドはヨーコ・ハーディンさんで、まずは市庁舎に向かった。ストックホルムは大小 14 の島から成っていて、それらは 56 本の橋でつながれており、ホテルがあるのは 2 番目に大きい King's Island で、市庁舎の前のメーラレン湖はスウェーデンに 10 万個ある湖のうち 3 番目に大きく琵琶湖の 2 倍もあるということであった。

市庁舎はストックホルムの観光名所で、市庁舎というよりも宮殿か古城を思わせる優美なたたずまいであり、北欧中世風の重厚感を有していた。また、ロケーションも水の都ストックホルムを代表するに相応しかった。106m の塔、全

体を覆う赤レンガの質感、ゴシック風の窓、ビザンチン様式の輝かしい金色の飾りなどが、調和のとれた形で目の前に広がった。City Hall と書かれた赤いワッペンを左胸につけて内部に入ると最初が青の間であった。高窓から青空が望めることからこの名がつき、ノーベルの命日である 12 月 10 日には、この部屋でノーベル賞授賞晩餐会が開かれるという。上階で作られた食事は、緩やかな階段で、多数の給仕によってこの青の間に運ばれて来るそうだが、一度にたくさんの料理を冷めないように作って配膳するのは至難の業であり、いろいろな工夫がされているそうだ。



2 階に上がると、まずは議長の控え室の上にある、市庁舎の作成に貢献した大工の棟梁の彫刻像が説明され、続いて市議会場に入った。椅子やカーテンの赤と、バイキング船の船底を模した天井の青のコントラストがきれいであった。ストックホルム市議会は定数 101 名で、そのうち 47 名が女性であるそうだが、現在は選挙準備のために休会中とのことであった。続いてカラクリ時計とセントラルヒーティングの吹き抜けのあるところを抜けて、オバールの間に入った。ここは 200 年前のゴブラン織のタペストリーが掛かっており、土曜の午後には市民の結婚式が行われるという。挙式時間はわずかに 3 分程で終了し、2 年前より同姓間の結婚も認められているのは流石であった。

一生涯独身であった殿下の像と、彼の描いたメーラレン湖と対岸の絵、さらには授賞者と国王が写真を撮るところを通り、イタリアと入札して競り勝った中国製のカーテン（イタリア製の 10 分の 1）を抜けて黄金の間に進んだ。1,900 万枚の金箔モザイクで飾られており、その中央にはメーラレンの女王が、向かって左側に米・仏などの先進国（自由の女神やビル、エッフェル塔）、右側に発展途上国（イスラム寺院や象など）、そしてその頭上には日の丸を呈して佇んでおり、なかなか迫力があつた。左手の壁の上方にはゆりかごから墓場までの絵が描かれていた。この部屋はノーベル賞の授賞舞踏会が開催されるという。部屋を出て、この建物の設計者であるラグネル・オーストベリの彫刻と、その左右のシャチホコをくぐって、階下へと降りた。

この市庁舎には、ピーク時には1日3,000人もの入場者があるというが、入場料は1人約800円ということだから、240万円にもなるのか！その後、お土産をみたり写真を撮ったりして10時40分にバスに戻った。お土産に木製の馬があったが、これは日本のこけしのようなもので、クルヴィッツの花が描かれており、ちょっと高めということであった。

バスで国会議事堂の脇を通ってガムラスタンを抜け、途中、9月に行われる総選挙(349議席)のために、どこかの政党が演説を行う準備をしている場所を過ぎ、まずはセーデルマイム島の展望の良いスポットへと向かった。こちらの島は沈下と隆起が激しく建物が少し傾いているという話であり、チーズ現象といって、地下はこれ以上掘れないくらいになっているという。また市内の各家庭は温水暖房によるセントラルヒーティングになっているとのことであった。なだらかな坂道になっている展望スポットからの景観は素晴らしく、右手奥からテレビ局、スカンセン、チボリ公園(コペンハーゲンとは異なる)、バーサ号博物館、ノルディスカ博物館という具合に美しく展開していた。



再びバスに揺られ、旧市街ガムラスタンを見学した。13世紀の中ごろから人々が住み始めた、ストックホルムで最も古い地区である。王宮の衛兵と写真を撮った後、ガイドさんについて石畳の細い道を進み、“鉄の少年”という小さい彫刻を案内された。これは毎日少しずつ小さくなっているとのこと、お賽銭をあげて頭をなでると願い事がかなうという。お賽銭はとにかく頭をなでて、楽しい旅行になるようお願いした。そしてストルツウデット（大きな広場）に出た。ここは別名ギロチン広場と呼ばれているが、これは1526年にクーデターを企てた貴族・高官ら90人余りが処刑されて血に染まったところから由来しているという。緑がないのと日光が入らないのがこの地区の欠点だというのが、細い石畳の道と古びた建物、そして現れる大広場のというところが、イタリアのシエナを連想させた。15分ほどの自由時間になったが、磯部先生とオレンジジュースを飲んで、にぎやかな石畳を散策し、王宮の手前にあるオベリスクのところに集合した。このオベリスクはてっきりバイキングの戦利品かと思ったのだが、グスタフ2世の名前が刻まれていて、この国で造られたものということであった。ガイドブックにある証券取引所は昨年引っ越してしまい、現在はビ

ルに幕が掛けられていた。王宮は 608 室から成るイタリアン・バロック、フランス・ロココ様式の建物で代々王室の居城となっていたが、現国王カール 16 世グスタフは、子どもたちにふさわしい環境へと、1982 年に郊外のドロットニングホルム宮殿に転居されたそうだ。

12 時 10 分頃、紺色の軍服が美しい行進を見た後に、昼食のイタリアンレストランに向かった。食後、額に飾られた写真を見ていると、店の主人が前イタリア大統領と一緒に写っていて、イタリアのパレスで撮ったものだと自慢気に説明してくれた。

食後、ストックホルムの郊外にあるドロットニングホルム宮殿の観光に向かった。王宮の設計者であるテッシン父子によって設計され、17 世紀に建てられた王室の夏の離宮であったのだそうだ。宮殿の手前の橋は、船が通るとスライドするようになっており、そのためにわれわれのバスは少し待たされてしまった。

バスを降りると左手にメーラレン湖が見え、その先に北欧のベルサイユともいわれる美しいクリーム色の建物がそびえていた。昔の国王はこの宮殿に船で乗りつけたり、冬になって湖が凍るとソリでやって来たりしたそうだ。僕らも、バスでなくて船で来たかったなあ。



この宮殿は窓が絵になっていたり、遠近法を利用して床が少し上がっていたり、奥の柱を短くしたりなどのトリックが応用されていた。大理石に見せかけた石膏の彫刻の説明から始まり、まずは 3 階から見学していった。グスタフ 3 世の好きだった部屋には染め物屋さんの色のサンプルが収められており、続くチャイナサロンにはカラクリ家具になっている警備員用のベッドが置かれていた（ジャバラになっていて引っ張るとベッドになるという）。ゴブラン織のイギリスの間にはオスカー 2 世の 12 等身の肖像画が掛かっていた。その次にはカール 12 世の肖像画があり、一生に一度しか会うことがなかった彼の妹が、戦いに明け暮れた兄を想って作った部屋とのことであった。絵の鼻の下には髭のような刺青が描かれており、これは勇気の印だったそうだ。

続くカール 11 世のギャラリーにはデンマークとの戦いが描かれていて、その

中で死んだ人のブーツや服を剥ぎ取る場面があった。そのようなことは昔の戦いでは日常茶飯事であり、奪った相手の軍の服を着て味方にやられてしまうようなこともしばしばあったという。ギャラリーの天井には善と悪を表わすラッパとヘビが描かれていた。国家の間にはナポレオン 3 世などの肖像画や、ヨハンシビリウスの描いた女神が住む宮殿などが描かれていた。

2 階に入ると、まずはタペストリーやカーペットが飾られる以前は壁革に絵を描いて飾ったとのことで、トルコからの戦利品で獲得したラクダとその世話をするトルコ人がモデルの絵が掛けられていた。カール 10 世のギャラリーには、1656 年のポーランドとの戦いを描いた画が掛けられ、実際よりもかなり大げさな陣容で描かれたそう。エレンストラウス謁見の間にはルイ 15・16 世に関する絵や、カール 10 世の未亡人の大きな絵が飾られていた。謁見の間に続いては、特に許された者だけが入れるベッドのある青と金の部屋で、この辺りは蚊が多くて随分と寝苦しかったそうである。緑のサロンには宮廷画家が描いた王族の絵が並び、グスタフ 3 世の幼少期の絵もあった。続くグスタフ 3 世の母の書斎と図書館では、彼の母は“エミール”を勉強し、二命名法の生物学者リンネからも教育を受けたとの説明があった。



宮殿から中庭に出て写真を撮った後、再びバスに乗ってチャイナパビリオンに向かった。マロニエの並木が美しい道を少し歩くと、踏み潰された大きなカエルの死骸があり、その先にそれほど大きくない中国風の建物が散在していたが、グスタフ 3 世の母親の中国趣味の倉庫ということであった。

15 時 55 分にそこを出発すると、スウェーデンに関するガイドさんの説明を聞きながら市内に戻っていった。この国の 50% は森林で人口密度は 18 名で、年金は 65 歳からだが、早期支給は 61 歳からとのことであった。また、テニスのビヨン・ボルグについて質問したが、現在はスウェーデンに戻って、ビヨン・ボリーというブランドのバッグや下着の会社を営んでいるそう。まだ明るいのに、車のヘッドライトを点灯しており、市街の地下鉄が郊外では地上を走っている姿も左手に見えた。

16 時 30 分過ぎにホテルに到着すると、絵ハガキを書いてシャワーを浴びた

後、**Kungsgatan**（王様通り）を市の中心部に向かってブラブラと歩き、朝市の辺りまで散歩した。途中、おそらくシャブ中と思われる上半身はだかで刺青をした男が、ギターを抱えてフラフラ歩いているのとはすれ違ったが、この国には似つかわしくなかった。

18 時 45 分にバスで出発して夕食に向かった。旧市街のあるガムラスタン島にある **Kallaren Diana** というスウェーデン料理の地下レストランは中々の雰囲気であった。初めポークということであったがトナカイの肉に変更になり、一瞬いやな予感が頭をよぎったが、やはり淡白で美味しくなかった！



（トナカイの肉は、ちょっと苦手です！）

昼食後のバスの中の説明で、ストックホルムでは1日おきに花火が上がり、海沿いの方が良く見えるとのことだったので、磯部先生と渡里さんご夫妻とともに地下鉄で **Kungstradgarden** に出かけた。22 時 15 分過ぎに駅を出ると花火の音が聞こえてきたので、ジャストなタイミングであった。カステンホルメン島かチボリの方から上げられていたので、観光船乗り場の脇の橋の上から異国の夜を彩る花火を見物した。30 分くらい続くのかなと思っていたら、15 分程して連発に上がり、その後遅れて 1 発上がって…それで終了になってしまった。たった 15 分だけのあっけない花火であったが、考えようでは、短い時間に凝縮され、見る方も飽きない、疲れない程度の趣きある花火であったとも言えよう。グランドあたりに泊まっていれば、ホテルの部屋が特等席になったのになあ…。

8 月 13 日（火） 晴れ、ベルゲンは夜になって雨

午前中はフリータイムとのことで、昨晚同様、磯部先生、渡里さんご夫妻とともに **Kungstradgarden** まで地下鉄で行き、そこから歩いてバーサ号博物館に行った。そこには個人的にガイドを頼んだ青木先生とタクシーで来られた十束先生ご夫妻もいらしていた。バーサ号は 1625 年に建造された全長 62m、最大幅約 12m、メインマストまでの高さ 52m、排水量 1300 t、乗組員 437 名という巨船である。1628 年 8 月 10 日の処女航海の際に突風で傾いてストックホルム港内で沈没してしまい、333 年後の 1961 年に引き上げられ、種々の修復がなされた後に展示されたとのことである。沈没の原因は、設計ミスか、大砲の積み過ぎなどと考えられるが、正確なところは不明であるそうだ。これだけの船

を引き上げるのはたいへんな労力であったと思われるが、間近にみるバーサ号は 17 世紀の船とは思えないほど美しく見事であった。

その後タクシーでNKデパートに移動し (80Kr)、店内を歩いてみた。思ったよりも小さく、物価も高いように感じた。お昼は、昨日のガイドさんが話していた人気のある回転寿司に行きたかったが、インフォメーションセンターは混雑してるし、結局どこにあるかわからず、福島さんが聞いてきたセントラル駅近くのすし屋も発見できなかった。結局、僕が昨日の夕方の散歩で見つけた、朝市近くの寿司 King(王様)に案内することになった。

店内はランチタイムと重なって地元の客で混雑しており、日本の寿司がインターナショナルになっている様を見ることができた。ランチのサーモンがさっぱりしていて美味しかった。昨年ケープタウンのすし屋で日本酒を飲み過ぎ、二日酔いで辛かったことが思い出された。

食後は礪波先生と Centralen から地下鉄でホテルの駅より一つ先になる Fridhemplan まで行き、警視庁の建物や小さな公園などを見てからホテルに戻った。十束先生ご夫妻は、市庁舎のレストランでランチを摂ったが、そこではノーベル賞授賞パーティーのディナーも食べることができるそうだ。昨夜のトナカイなら、そっちの方がずっと良かったなあ…。

13 時 30 分少し前にホテルを出発して、バスは空港へと向かった。ドライバーはエリックさんで、ガイドは 1 昨日の伊藤さんであった。14 時 5 分に空港に到着し、チェックインは結構待たされてしまった。ストックホルムの市内ではイスラムの格好をした女性を何人か見かけたが、空港にイラン航空のデスクがあったので伊藤さんに聞いたところ、スウェーデンは移民を受け入れており、フィンランド系に次いでトルコ・イランなどのイスラム系が多いとのことであった。

SK-495 便は定刻を少し遅れて 15 時 35 分に離陸した。機内では慌しくスナックと飲み物のサービスがあった。その間、眼下は白い雲に覆われていたが、16 時を廻ると、まるで綿菓子のような雲の切れ間から、青々とした湖水と緑の大地が顔を出してきた。そろそろ国境を越えてノルウェーに入ったかと思われる 16 時 5 分に、あと 10 分ちょっとで到着というアナウンスがあった。スウェーデンもノルウェーもこんなにたくさんの湖があるが、その一つ一つには名前が付けられているのだろうか？ ふと、そんなことを考えてしまった。16 時 17 分、オスロに着陸した。

ノルウェーの空港は、ストックホルムのそれと同じようにのどかな感じを受けた。そののどかさの為か、トランスファーのバグゲージドロップで長々と待たされてしまった。まったく要領が悪いようで、遅々として進まないのには腹が立ってしまった。

荷物検査では、成瀬さんがショルダーバッグを開けられ、いろいろ点検されて、SK-327 便ベルゲン行きのゲートには中々進めなかった。福島さんも焦ってきて、他の人たちを飛行機に乗せるために先に走ったが、心配だったので僕は残って、陽ちゃんにも先に走るように言って、成瀬さんを待って一緒にゲートに行った。ところが・・・Too late・・・という氷のように冷たい事務的な言葉・・・、福島さんと成瀬さん、陽ちゃんそして僕の 4 人はこの飛行機には乗れないと突っぱねられてしまった!! ピンチ! さっきのストックホルム発は 15 分も遅れて平然としていたのに、それに、まだ 327 便の出発の 17 時 5 分にもなっていないのに!

“Are you kidding? Oh, my gosh! What a nightmare!”

PC を打って忙しそうにして突っぱねた手前側にいた女係員に向かって、

“There is a deep friendship between your country and Japan about catching whale. ” とか “Without TD, many tourists will be lost in the Bergen airport.” などと、大声で怒鳴ると却って収拾が付かなくなると思い、少し聞こえる程度の小声でウダウダ言っていたが、その間福島さんは顔を引きつらせながら “Please・・・please ” と必死にお願いしていた。

僕はもう半ばあきらめ、添乗員さんがいなくて、むしろ先に行ってしまう人たちはどうなるのだろうなどと心配し始めた。次の瞬間、奥に座っていたちょっと上司っぽい女係員から、荷物の積み込みが終わっていないので OK との言葉があり、かろうじて 327 便に乗り込むことができた。福島さんは、さぞかしホッとしたことでしょう。 “I can't tell you ,how relieved I am ! ”

一方的に向こうが悪いのに、何という無礼な扱いなのであろうか。綿密な連絡を取り合って、もっと乗客の便宜を図って欲しいものである。SAS とノルウェーに対する呆れた思いを抱きつつベルゲンに向かうのであった。

18 時 5 分にベルゲンの空港にランディングし、後ろのタラップから降りたところ再びボーディング・ブリッジに登られ、ややこしい到着になった。涼風が心地よく、半袖では少し寒いくらいであった。5,000 円を両替した後、空港を出発した。運転手はヤーラさん、ガイドは庄司久美子さんで、ベルゲンとノルウェーについての説明があった。ベルゲンは雨が多く 1 年の 3 分の 2 が雨であり、今日も午前中ちょっと降ったそうだ。午後は概ねうす曇りであったが、にわか雨も多いので雨具を携帯するようにとのことだった。また、ノルウェーの紙幣・硬貨についてと 310Kr 以上が免税となる旨、そしてトロール人形や銀製品、木箱やセーターなどのお土産品についての話もあった。飲料水や置き引きなどの一般的な注意があった後、鮭と甘エビなどの詰め合わせ (750Kr=1 万円) について説明したが、ノルマでもあるのか、明日はガイドが代わるので、本日に申し込んで欲しいと力説していた。

ファーストマリーホテルは、ブリッケンとお土産店の間をちょっと上がった所でグッド・ロケーションであり、新しくきれいだった。しかしカーテンを閉めないと隣の建物から丸見えで、せめてレースのカーテンくらい設置して欲しいところだ。ホテルの玄関脇には温度計が備え付けられていたが、21℃を示していた。

20時少し過ぎにホテルを出て高台にある Bellevue (ベルビュー) というレストランに向かった。この高級レストランにはすでに日本のツアー客が食事を終えようとしており、法律について大きな声で話していた。彼らが去るとわれわれの貸し切りとなり、窓際の席が空いたために街中の景色が良く見えるようになった。キャビア添えのタラのマリネとサラダが前菜で、メインのサーモンと白身魚もとても美味しかった。添乗員さんから少しおしゃれをした方がいいという話があったそうだが、よく聞いていなくてジャケットを着るのを忘れてしまったが、青木先生も普段着だったので別に気にならなかった。食事をしながらの会話で、成瀬さんからストックホルムのホテルは暑くて最悪であり、『丸の内倶楽部』に相応しくなく、『丸の内西口倶楽部』という感じであると話されていたが、思わず笑ってしまった。僕の部屋も強い西日が入った為か、暑くて寝苦しかった。もう少し海辺に近ければ(グランドとか)、涼しかったのではないだろうか。

このレストランからの眺望を期待していたが、いつの間にか雨が降って霏ってきてしまったために、ベルゲンの夜景は見られず残念であった。ガイドさんの話したことが当たり、明日からは雨が降らなければいいが、と思った。21時50分頃ホテルに戻った。

8月14日(水) 晴れ

6時に起床したが、ようやく良く眠れた。朝食後、街中をちょっと散歩したが、ホテルの前の“NAMA”というすし屋が印象的であったが、これはオスロに本店がある寿司のチェーン店ということであった。



(ベルゲンの朝の風景)

8時にホテルを出発してバスでゾグネフィヨルド観光へと出発した。ガイドは

上野さんで、こちらに嫁いで 30 年、ガイド歴 14 年のベテランの方で、赤いスーツがちょとおかしかった（ベルゲンのガイドは皆赤い服を着ているという）。

道路の両サイドにはピンクの花（柳）が低く咲き、これは菜の花をピンクにしたような感じであり、また、ハマナスが赤い実をつけてきれいだった。そんな緑多い北欧の夏の風景の中を、“シークレット・ガーデン”というノルウェーのグループの曲を BGM に、まずは左手に海を見ながらバスは進んでいった。20 分ほど走ると左に駅が見えたが、この辺りが Arna で、その後は長いトンネルが多くなってきた。

上野さんはベルゲンから高速船で 2 時間半くらい北に行った Askvoll という人口 500 人の村に住んでいて、夏の間はガイドとして仲間と部屋をシェアしてベルゲンに住んでいるという。ご主人は半分スウェーデンの血が入ったノルウェー人で、船の機関長で修理のために神戸に来ていた際に知り合い（彼女は大阪人）、2 年間の文通を経てご結婚され、29 歳(男)と 26 歳（女）の 2 人の子供がいるという。Askvoll には缶詰工場があったが、ヨーロッパの他の人件費の安い所に移転したために、75 人もがクビになってしまったそうだ。

ベルゲンは 13 世紀にはこの国の首都として、14～17 世紀にはハンザ同盟の都市として栄え、昔から海洋貿易が盛んで、現在はサービス業が主となっている。鉄道とか養殖場とかで働く公務員も多く、ヨーロッパで一番公務員の割合の高いところの一つだそうだ。左手にフィヨルドを見、長いトンネルをいくつも抜けてバスは進んだ。Dale が近づくと、繊維と毛糸の工場が右手に見えてきた。ここのセーターは質がいいのでお土産にいいとのことだった。

海（フィヨルド）と湖、川との違いは見ただけでは難しく、実際にはなめてみないと分からず、ガイドさんは詳しい地図で把握しているから分かるのだそうだ。フィヨルドも潮の干満により多少の流れができるが、流れのないフィヨルドや湖水に山々が映っている様は、逆さ富士とは趣きを異にしており、北国らしい感じであった。また、急峻な山々が迫り来るカナダの雰囲気とも明らかに違っていた。右手に流れる川は、川底が見えるほど澄んでいたが、今年は降水量が特に少ないので水量が乏しいということである。山々の木はトド松と赤松が圧倒的に多く、他は柳系、白樺、ポプラなどで、木が見えるのは 800m くらいまでで、800～1000m は木がまばらでコケが生えるようになり、1000m を越すとコケも生えなくなるという。この辺りの家は赤松が材料で、上野さんの家の冷蔵庫は香りの良いトド松を使っているという話であった。

9 時 20 分頃になると、右手にボス湖、その向こうの山々には雪も残っている美しい風景が続いた。万年雪かと思ったが、温暖化の影響で万年雪は数年前に溶けてしまったそうだ。ボス駅を抜けて、13 世紀に建てられたボス教会を少し過ぎた所のお土産店で、9 時半から 30 分の休憩があった。店の前には 2 m 以上

もある大きなトロール人形があり、店内にもたくさんのトロール人形が美しく飾られていて、思わず写真を撮ってしまった。またガイドさんが、この商品は品もよくてお得と言うので、Dale 製のセーターや、バスで流れていたシークレット・ガーデンの CD などを購入した。



(美しいボス湖の風景)

庭にリンゴの木が植えられている光景などを見ながら再びバスに揺られると、白い袋に入れられた牧草が所々に散見されたが、これはサイロに入れるのと同じような効果があるそうだ。しばらく行くと、オプヘイムという村を通過した。オプはアップ、ヘイムはホームの意味ということであったが、村にはアル中患者の療養所があり、その少し先には中古のキャンピングカーを利用したキャンプ場があった。さらにバスは高所に進んでいき、スタールヘイム（馬小屋という意味）ホテルで小休止した。その展望台からの眺めは素晴らしく、ノルウェーの奥地に来た実感が湧いてきた。10時55分に集合して、この谷の13のカーブを下って進んだが、右にスタールヘイムの滝、左手にシグレの滝が見え、カーブの度にバスの中で右往左往してしまった。少雨のためにもともと水量が少ないとのことだった。この急坂を登ってくる車に対して、“こんな所を上がって来るのはドイツ人！”と上野さんは2度わめいていた（ナンバーでどこの国の車かわかるのだそうだ）。

川沿いの切り立った山からは数筋の細い滝が流れ、それを見ながら11時10分頃、グドバンゲンに到着した。グドは神を、バンゲンは水のある所を表わし、キリスト教が入ってくる前のいけにえの場であったところの意味があるそうだ。11時30分発のフィヨルドクルーズ船に乗り込み、いよいよゾグネフィヨルド観光がスタートした。

両側には1,800mもの山々がそびえ、しばらく進むと岩の上にアザラシが寝そべっているのが見えた。30分ほど行くと、左手にはディールタール（動物の谷の意）という村が見えたが、住民はたったの3人であるという。船の1Fでハンザビールを飲みながら“すもう弁当”を食べた。昨年までの弁当の方が美味しかったそうだが、その弁当屋さんがつぶれてしまったため、フィリピン人がやっているお弁当屋さんに頼んだのがこの“すもう弁当”なのだそうだ。確か

に美味しくなかったが、磯部先生がクジラの肉が入っているのを見つけて教えてくれ、少し懐かしい味を楽しんだ。



フィヨルドの風景は、船の1Fに描かれていたように山々の頂きに万年雪が残っていることを想像していたのだが、仲間と昨秋行った奥只見湖の遊覧船とあまり変わらないような感じであった。グドバンゲンからネーロイ（近い島）フィヨルドを進んだクルーズ船は右に旋回し、アウランドフィヨルドへと入っていった。上野さんがカモメたちに餌をあげると言って、パンを持って甲板に出たので、退屈しのぎに僕もついて行った。投げたパンに吸い寄せられるようにカモメが急加速してくわえて行く様子は、将に“ナイスキャッチ”という感じであった。僕が投げ与えるのを見ていた外人の少年に、君もやってみるか、と声をかけると、待ってましたとばかりに喜び、彼の家族といろいろ話をするキッカケになった。彼らはスペインのセビリヤから家族5人で旅行に来たという。僕の持っているデジカメに興味を抱いたようで、いろいろ話し込んでしまった。



カモメやスパニッシュたちと遊んでいると、船はアウランドで一度止まり、13時40分頃フロムに到着した。フロムではフリータイムになり、その時間を利用して絵ハガキを書いてフロム郵便局から投函した。また、船着場の1という表示板（その下にFYLKESBAATANEというこの県の名前が書かれていた）のところで、われわれが乗った船（Skagastolという船名）をバックに写真を撮ってもらった。

14時35分のフロム鉄道に乗車したが、われわれは一番前の車両に乗り込ん

だ。この車両は **JTB** などのツアーもいて日本人ばかりであった。予想に反して 10 両ほどもあって、なかなか立派な列車であった。溪谷に沿った 20 キロの行程を約 1 時間で走り、その間トンネルが 20 コあり、計 6 キロにもなるという。また、海拔 2m のフロムから 866m のミュールダールまで、世界でもっとも勾配がきついそうだ。

定刻を 2 分ほど遅れて発車し、右手下に美しい川の流れを見ながら進んだ。2 分ほどで **Lunden** の駅を通り過ぎると、右側にいくつものリンゴの木が見えた。2 つ目の **Hareina** は、かつてのフロムの中心であったところで、300 年以上前に建てられた教会があった。2 時 50 分頃、川は左手に見えるようになった。われわれの座席は列車の先頭であり、景色が見づらいシチュエーションであった為、僕は席を立ててデッキから車窓を眺め、ガイドینگ・レシーバーで上野さんの説明を聞いていた。険しい谷間の間に小さな畑があって、ジャガイモやキャベツが栽培されているという。こちらには野菜を食べる習慣はなく、精々ジャガイモくらいであり、サラダなんかは食わず肉や魚の加工品ばかりだそうだ。

真ん中の **Berekvam** ですれ違いの列車待ちとなり、少々停車した。‘44 年に電化されるまで、蒸気機関車が走っていたとのことで、夏こそ 10 往復くらい運行されているが、冬になると 2 両ほどになり、往復 4 回くらいになってしまい、地元の人の足としてのみ利用されるそうだ。再び進むと、ヤギの放牧されているような風景も目に入ってきて、牧歌的な穏やかな雰囲気を感じ、また、右手に移動した川は、遠くから見ても川底まで透けて見えるほどの清流で、気持ちが安らいだ。また、途中、いくつかの滝も見ることができた。



Kjosfossen 駅で途中下車しショッスの滝を見物した。観光客が一斉に出てきたためホームは混雑し、なかなかシャッターチャンスをゲットできなかった。そんなとき先ほどのスペイン一家と再会し、写真を撮り合ったり、またいろいろと話し込んでしまった。発車のベルぎりぎりまで真ん中あたりの車両に乗り込み、先頭車両に移動しようとしたが、途中のドアが開かずわれわれのグループの元に戻れなくなってしまった。仕方がないので、先ほどのスペイン人の席

に行って、時間つぶしにいろいろと話してきた。写真を送り合うために住所の交換をしたが、彼らは電話番号までも教えてくれて、ぜひ遊びに来てくれということになった。よし、次はスペイン（セビリア）だ！

ショッスの滝では男を水際に引き寄せるといふ、妖精役の女性が出てくるといふことであつたが、混雑とスペイン一家との会話に夢中だったために見逃してしまった。その後、ミュールダールに到着する直前に、荷物置き場に隠れるように座っていた女性の車掌を見つけて、何とかドアを開けてもらって先頭車両に戻ることができた。

ミュールダールでは10分ちょっと列車待ちをし、15時53分、ベルゲン行きに乗車した。頂きに雪が残る山々と美しい湖、緑が映える中を、列車は快適に進んでいった。途中15分くらいウトウトすると、ティーブレイクになった。ボスの駅で喫煙休憩があつたが後、上野さんの隣に座って、ノルウェーについて20分位いろいろと質問した。

ベルゲンには日本人ガイドは20名いて、そのうち日本人2名・ノルウェー人1名の男性ガイドもいるという。男性の場合は他に仕事を持っていて、忙しいときに刈り出されるのだそうだ。この30年でベルゲンは大分観光化され、20年位前からボチボチ日本人も来るようになったとのこと。しかし上野さんのお宅のあるAskvollは、30年ほとんど変化のない田舎ということである。また、30年前にノルウェーに嫁ぐという時に、そんなところに行ったら売られてしまう、と家族に反対されたという話もしてくれた。

また、スウェーデン同様ノルウェーも移民を受け入れているので、種々の犯罪も増えてきたらしい。特にオスロなどでは多いという話であり、上野さんは怖くてオスロには行けないなどと言っていた。ベルゲンにも、今年2人のジプシーが住み着いてしまったとのことであつた。17時52分ベルゲン到着。

19～20時20分ころまでホテルの食堂で夕食となつた。本日もサーモン料理がメインであり、こちらでは中々食べられないというサラダも美味しかった。

まだ明るい街を、成瀬さん、陽ちゃんと食後の散歩に出かけ、お土産店をのぞいたりして街の雰囲気を楽しんだ。少しひんやりとして気持ち良かった。陽ちゃんは先にホテルに戻ったが、いろいろな話をしながらブリッゲンや港をブラブラと散策した。成瀬さんは小型のプリンターを持参しており、デジカメで撮影した写真を翌日に渡してくださったり、また、その他もいろいろとツアーを盛り上げていただいた。

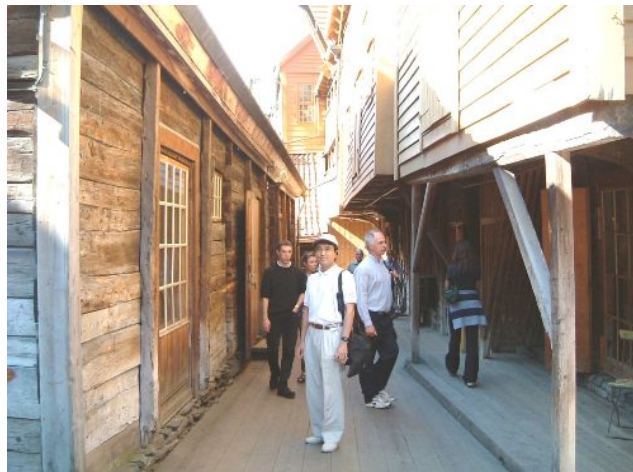
その後ホテルのバーで飲んでいると、22時20分過ぎに阪神のツアーの団体が、上野さんに率いられ、疲れた身体を引きずりながら入ってきた。今朝、関空を出てきたというが、アムステルダムで4～5時間待たされて、もうクタクタであると話していた。その語部屋に戻り24時頃に就寝した。



8月15日（木） 晴れ

今日は10時半にホテルを出発という、とてもゆったりとした日程になっていたが、6時45分に起きてしまった。MDで本日観光するグリーグの「過ぎた春」「夜想曲」などを聴きながら絵ハガキを書いた。

朝食後、9時過ぎより1人で朝市を見に行き、港の反対側の方までウロウロ歩き廻った。朝市ではサーモンやサーディンをはさんだパンなどが売られており、ホテルではなく、こちらを朝食にすれば良かったと思った。サーモン以外にも種々の魚や海産物が売られており、結構にぎやかであった。また、いろいろなキャビアがあり、**Salmon caviar**はいくら、**Silver caviar**はかずのこ、といった具合で、他はししゃも、と **Norwegian caviar** というだんご魚のたまごがあり、それぞれを試食した。はっきり言ってあまり美味しくなかった。流石にチョウザメのキャビアは高価であり、試食はダメであった。



出発の10分前ころに戻り、バスに乗り込んだ。まずはブリッゲンを訪れ、ハンザ同盟時代にドイツ商人の家・事務所・倉庫として建てられた木造の家々を見学した。これらの建物は傾いており、これは地盤沈下ではなく、工事が雑なためということであったが、日本だったら地震でとくに潰れてしまったらろ

うと思われた。現在はお土産店とか美術工芸家のスタジオとして使用されているそうだ。

すぐにバスに戻り、1150年代の石造りのマリア教会を右手に折れ、フロイエン山に登るケーブルカーの駅を右に曲がってハンザ博物館に到着した。1350年代にハンザの人がベルゲンに入り、以後400年間続いたが、密集した木造建築であったために度々火事で焼失し、その度に復元・修復されてきたのだそうだ。

この博物館は1702年に建てられたもので、当時の建物の様子が再現されている。まずは、1階の薄暗い部屋に入ると天井から下げられた干しダラが目に入った。タラはベルゲンの富の源泉であり、地元のハンザビールのラベルにも、右が干しダラ（ノルウェー）、左側にタカ（ドイツ）が描かれているほどである。fish oil（タラの油）から肝油の話になり、牛のしっぽで床にこぼれた油をふいてしぼってまた売ったという説明があった。籠に入れられたたくさんの干しダラの上に1匹のネズミの模型があったが、これは数年前までベルゲンにペストの博物館があって、そこからもってきた名残ということであった。

2階に上がると、まずは夏に使用する食堂に入った。火の気はランプのみで、天井には火災予防の革のバケツ（この中に水をいれておく）と、タラとチョウザメの“ミイラ”が吊るされ、天秤や飲み水用のタンクなどもあった。冬は暖をとるために火を使うので、食堂は別棟になっていたという（それも焼失してしまった）。支店長がいた部屋には金庫や収納があり、階下に通じる隠し階段もあった。ガラス越しのデスクは、狭いながらもうまく造られていた。ベッドの壁には女性の絵が掛けられていた。

3階では、丁稚・小僧さんのベッドルームから案内された。内側から開かない造りになっており、当時の過酷な労働環境が想像された。番頭さんの部屋にも金庫があり、カレンダーや射撃的になるオーム、丸と四角のトランク、洗面用具、お仕置き用のムチなどが置かれていた。ベルゲンのドイツ人は1700年代後期に引き上げ、この館にはノルウェー人が入ってきたが、その事務所は3階に設けられていた。暗い客間には造りつけのベッドがあり、ノルウェー人達はここには住まずに、別に住居を造って住んだという。

この博物館の観光はたいへん混雑しており、このような雑な木造建築内に、こんなに多くの人が入って大丈夫なのだろうかと心配してしまったが、実際、本日は日本人観光客が多く、英語のガイドまで刈り出されているとのことであった。

12時頃、ケーブルカーでフロイエン山に登った。傾斜26°の急な勾配を上がると、視界が一気に開け、美しい光景が広がっていった。天候にも恵まれ、空と海の青と、木々の緑、雲と建物の白、屋根のオレンジがとても美しく、ベルゲン市内の眺望は将に絶景であった。山頂のレストランでローストポークの昼

食を摂り、ノルウェーの国旗がはためく絶好のロケーションで写真を撮った。山頂の駅の上には、現在運行しているところを示すがケーブルカーの模型があった。帰りのケーブルカーは臨時便でなかったために各駅停車であった。この途中には幼稚園があつて、園児が優先になる時間帯もあるという。13 時発の便で下山すると、15 分程の自由時間となった。



もう一度朝市を見て廻り、また、渡里さんから朝市で買ったチェリーをいただいたが、甘くて美味しかった。

バスで港の反対側の船着場に廻り、グリッゲンや帆船をバックに写真を撮った後、グリーグの家に向かった。途中、200 年以上も前の古い街並みを通り、ベルゲンの山の手を進んだ。市街地より 10 キロ、ほどなくしてトロルハウゲン（トロールがいる丘という意味）に到着した。駐車場から徒歩でブナの並木道を歩くと少しヒンヤリとして、木漏れ日が気持ちよかった。切り口がトロールの顔に似ている木があり、トロールがいる丘に相応しいと感じた。5 分ほど進むと狂い咲きしたシャクナゲが見え、グリーグの家はすぐであつた。



19 世紀、ベルゲンは 2 人の偉大な音楽家を輩出した。作曲家のグリーグとその叔父にあたり北欧のパガニーニと呼ばれたオーレ・ブルである。グリーグの父は英国領事を兼ねたベルゲン商人で、母はデンマーク人。妻は従妹のデンマーク人でその子は生後 13 ヶ月で脳炎で死亡してしまったという。グリーグの家

はオーレ・ブルの甥の建築家が設計したとのことである。グリーグが 42 歳のときに建て、64 歳で亡くなるまで住んだ白と緑のヴィクトリア風の木造の建物はなかなか洒落ていて、周囲の木立と調和していた。中には風景画や肖像画が掛けられ、愛用のピアノも置かれていた。この部屋にあった、四つ葉のクローバーをくわえたブタとお守りのカエル、トロールの一種である赤い小さな置物が印象的であった。成瀬さんが“赤いのはベルゲンのガイドかと思った”と言うとガイドさんが“今度からそう説明しよう！”と言って笑ったが、ナイスなボケであり、将に“座布団 1 枚”であった。



その後、入り江に向かって細い道を 5 分ほど降りて、グリーグの仕事小屋に至った。ピアノとソファ、机があるだけで、目の前はすぐ海であり、作曲に没頭するストイックな仕事ぶりを彷彿とさせてくれた。大柄な北欧人からは想像できない、思いのほか小柄な彼の実物大の像（150 cm ちょっと位か）と写真を撮り、200 名が収容できる音楽ホールを覗いた。続いて仕事小屋とは反対の方に進み、グリーグの遺言によって、妻ニーナとともに埋葬された、海（フィヨルド）を望む岩壁に作られた墓を見てきた。穏やかな海は波ひとつ無く、澄んだ海底にはたくさんの貝を見ることができた。

15 時 30 分を過ぎ、バスは一路空港を目指した。ガイドの上野さんからは、ノルウェーにおける一般的な年収は 15～20Kr で、高収入の人になると 40～50 万 Kr だが、所得税が 24～30%、31～40 万 Kr になると 31%、40～50Kr 以上になると 48%になり、日常生活は質素であるなどの話があった。高齢者施設へ支払うお金は年金が当てられ、最低の老人年金は 6 千 Kr/月であり、年金の平坦化が進められているそう。また、医療費には 36%の個人負担があり、1350Kr を超えると、それ以上は無料になるということであった。

工場が 3 時に終わり、その帰りの渋滞を見ながら、バスは空港に向かったが、この国ではオーディやベンツが比較的多いように感じた。4 時頃には空港に到着し、上野さんとお別れした。Cash Refund をした後、お土産店などを見たり、陽ちゃんのチェの輪にトライして時間をつぶした一結局、僕はダメでした。17 時 5 分の SK869 は 30 分遅れで離陸し、コペンハーゲンには 18 時 45 分に到着

となった。

いよいよ旅行も佳境を迎え、マッチ売りの少女が住んでいた街にやって来た。空港には 2 階建てバスが迎えにきており、その 2 階の一番前に乗り込んだ。運転手はキムさん、ガイドは日本名“織田信長”というラッセさんであった。ラッセは 8 年前にロータリーの交換留学生で、埼玉の坂戸高校に 1 年間留学し、その後も日本に行って、英会話の教師などをした経験を有しているという。空港を出て少し行った右手には、スウェーデンに続く高速道路が通る橋があり、これは世界で 2 番目に長い橋ということであった。1 番は日本の橋で、わずか 5cm の違いということである。また、アマの浜辺はブラ無しの人が多いので、注意して見るようにと説明していた（ドライバーは見ないように）。また、風力発電やチボリ公園、ラディソンホテル内にあるカジノなどについて話していた。右手に見えた救世主教会はひと際高く、金の飾りが夕日に美しく輝いていた。黄色い看板プロミスでなくて Netto というスーパーマーケットを左に折れるとホテルはすぐであった。車から降りる際に、自転車道路を走る自転車には注意するよう説明があった。

スカンディック・コペンハーゲンには以前はシェラトンあり、近代的なホテルであった。ホテル内のレストランで 20 時 30 分から少し遅い夕食となった。生ハムとメロンが美味しかった。食後、歯肉が腫れて痛いという太田さんに、メイアクトとロキソニンを差し入れにいった。そろそろ眠ろうかと思った 23 時 45 分に、突然花火が上がった。6 階の部屋からは何とか見ることができたが、チボリ公園の方角からだったので終園の合図だと思ったが、どうやらチボリ公園の開園記念日であったために打ち上げられたものだったようだ。

8 月 16 火（金） 晴れ

6 時 40 分に起床した。朝食前にホテルの前のサントヨエンス湖の周りを散歩してきたが、風が強くて、噴水の水が少しかかってしまう程であった。ストックホルム同様、ジョギングしている人が多かった。

9 時から観光が始まった。運転手はオーベさん、ガイドは石崎さんという男性であった。まずは、ホテルの前にあるタイル張りの円柱の建物は、プラネタリウムであり、湖は 18 世紀に作られた貯水池ということであった。コペンハーゲンの人口は 50 万で郊外を合わせると 170 万人で、市内の建物の 8 割は 100 年以上前に建てられたものということである。デンマークは九州とほぼ同じ面積で人口は 530 万人、1 人あたりの国民所得は高いという。中央駅の前には農奴の解放記念碑があった。

デンマークの老人ホームは 1 人 2 部屋もらえ、家賃と暖熱費のみで入れること、大学はすべて国立で入試は無いこと、国民年金は 63 歳から支給されること

などを石崎さんは次から次に説明してくれた。また、年間 3 万 Kr までは無税だが、3～15 万 Kr だと 52～3%、15～25 万 Kr だと 63%、25Kr 以上になると 68% の直接税になり、間接税も 25%あるということで、物価の高いこの国は暮らし難いのではと感じた。さらに、自動車を購入すると、ナンバープレートの登録料が 200%にもなり、例えば、100 万円の車を買うと 300 万円支払うことになるという。ちょっと恐ろしい話だが、環境には良さそうだから、日本も見習った方がいいのかもしれない。また、こちらは退職金・ボーナス・交通費は支給されないということだが、退職後のケアがしっかりしているからなのであろう。

街の中心部にある市庁舎の 3 階部分には、コペンハーゲンの街を造ったカトリックのアブサロン大僧正の立派な彫刻が飾られており、市庁舎の塔（106m）以上の建物を建てられず、また、市街地では外観を変えられないという市条例のために、辺りは古いたたずまいが残されている。続いて、現在国会議事堂として使われているクリスチャンスボー城の前には、憲法の父と言われるフレデリック 7 世像があり、ほどなくしてニューハウンに到着した。新しい港という意味で、かつてアンデルセンが住んだ場所である。



彼は貧しい家庭に生まれたため、生涯貧困の恐怖から抜けきれなかったという。また、生涯独身を通したので、長期の外国旅行の際にはアパートを引き払って経費を節約し、帰国すると新たにアパートを探したために、ニューハウンの 18、20、67 番地が彼の住んでいたところになる。第 2 次大戦で亡くなった海軍兵の鎮魂の錨が置かれており、この運河を作らせたクリスチャン 5 世（約 300 年前の王様）の像もあった。

また少しバスに揺られ、アマリエンボー宮殿へと向かった。バスの駐車場から歩くと、港にはマイクロソフトを作った 10 人の起業家の 1 人が所有するという豪華船が目に入った。5000 万ドルというから…60 億円以上もするのか！

フレデリック 5 世の騎馬像を中心とした八角形の広場を取り囲む 4 つのロココ調のたてものがアマリエンボー宮殿である。18 世紀末に当時の宮殿であったクリスチャンスボー城が炎上してしまったため、4 人の貴族のマンションを取り上げて宮殿としたもので、以来、200 年間も宮殿として使用されているという。熊の毛皮の帽子をかぶった衛兵が立っていなければ、宮殿とは思えないほど質

素なたたずまいであった。国旗があがっておらず、本日、女王様は不在であるとのことであった。ちょうど衛兵の交替の場面を見ることができ、彼らを追いかけるように写真を撮った。

デンマークには徴兵制があり、9ヶ月の兵役が義務付けられているという。その中でも衛兵は人気があって、兵役期間は12ヶ月と少し長くなってしまうが、98~99%が志願兵ということであった。衛兵には身長179cm以上という条件があるのだそう（僕はムリです）。

デンマークの産業は第1位が薬やセメント、風力発電などの工業で、2位が農業で、ブタ肉やチーズ、エビなどで、3位が観光業という説明に続いて、北欧一の海洋会社マースクライスの横を通って、人魚の像に向かった。デンマークの女王様のおかえコックさんは日本人の近藤さんであるという話も出た。ゲフィオンの噴水は、4人の息子を牛に変えて大地を耕したという北欧の伝説に基づいて作られたそう。右手にはカステレットという日本の五稜郭のような要塞があり、現在でも軍隊が使用しているということだった。そこをグルッと廻ると人魚の像に到着した。



人魚の像は思っていた以上に小さくて、その割にはたくさんの観光客が群がっていた。割り込むように入り込んで写真を撮ってもらったが、海の方こう側は工業地帯になっていて、哀愁漂う人魚姫というイメージとバックグラウンドとのギャップに違和感を覚えた。流石に世界3大ガッカリの1つである。'64年に首が、'84年に腕が、そして'98年1月には再び首がもぎとられたそうだが、そのつなぎ目がしっかり修復されているのを確認できた。その後アイスクリームを食べてからバスに乗り込んだ。乳脂肪が多い割にはあまり甘くないようであった。

デンマークでは1人の女性が1.8人の子供を産み、ヨーロッパでは多い方であるとのことだが、これは保育環境が充実しているためであろう。また、国会議員179名のうち38%が女性であるという。国会議員や市長、知事は有給だが、県議、市議などは無給で、それらの議会は夜間に開催されるのだそう。1953年に憲法改正があつて、2院から1院制に変わったという。ペンシルバニア大学の先生が、世界で一番住みやすい国はデンマークという調査結果を出したそ

うだが、その中で、政治家の汚職が最も少ないという事柄も入っているという。自動車税の問題も含めて、この国から日本もいろいろ学ばなければならないところが多いのではないかと思われた。風車は6千基あって、電力の14%が風力になっているそうだ。国民学校は日本でいう小中1貫で9年制になっていて、18歳までは歯科治療は無料で、学校に歯科医が来て治療する制度があるからであって、25%の子供が矯正をしているという話であった。後でラッセに聞いたところ、学校の歯科治療はヘタなので、かかりつけの歯科医院に通う人も多くいるとのことであった。

その後、免税店アメリエに行ったが、日本人ばかりでつまらなかった。いろいろ見てみたが、例によって何も買わなかった。

12時からカフェ・ロイヤルにて昼食となった。スモーブローであったが、地元の人が注文していたサンドイッチの方が美味しそうであった。

1時になると約5時間の北シェラン島ツアーに出発した。ガイドはヨーコ・シャンドルフさんになり、運転手のオーベさんの奥さんのウラさんも仕事休みということで同乗した。渡里さんご夫妻は参加されず、市内観光に出かけ、青木先生はまたもプライベート・ガイドツアーに出発された。

バスはチボリ公園の前を進んだが、TIVOLIは右から読むとI LOV ITになるといい、昨日(8/15)が開園記念日で、来年160歳になるそうだ。デンマークは7月が一番暑く、例年は8月半ばになるともう涼しくなって、月末には暖房を入れるのが普通ということだが、今日も28℃にもなり、かなり暑い夏が続いているとのことであった。

デンマークではホームドクター制が採用されていて、医療費がかからない仕組みになっている話をしてくれた。また、薬剤費は自己負担だが、慢性疾患に指定されれば安くなり、指定医を変更したい場合には、初診料のみは支払わなければならないと説明があった。ヨーコさんは学校の先生のように、ちょっと怖そうな感じだったので、食後のお昼寝タイムも取らずにしっかり聞いてしまった。

また、吉村昭の『海の史劇』という日本海海戦をテーマにした小説の中に、明治37年にフィンランド湾の奥にあるロシアの軍港を出航したバルチック艦隊が、バルト海を抜けてスウェーデンとデンマークの間の狭い海峡を通る際に、日本海軍の水雷艇・潜水艇による攻撃を神経質すぎるほど警戒したということが書かれている。実際には、日本の諜報機関が同盟国イギリスの協力を得て流した偽情報であったのだが、このような神経戦が続いた挙句の日本海海戦であった訳で、そのような歴史的な観点から、是非この海峡を見たいと思っていたので、眠る訳にはいかなかった。

デンマークの高速道路は無料であり、山が無い国なので海拔273mが最も高い

所になってしまうそうだが、山が無ければガケの補強やトンネルなどお金がかかりそうな個所がないので、きっと道路工事費も安価なのではないだろうか。

また、デンマークは1つの半島（ユトランド半島）と400あまりの島から成っていて、その島の中ではシェランド島が一番大きいこと、国土の6割が農耕地で2割が森林になっている、などの説明が続くと、海峡を隔てた対岸に、スウェーデンの街並みがはっきりと見えるようになってきた。このオーレスンド海峡は塩分が少ないため塩害が少なく、海も穏やかであり、また、コペンハーゲンからも1時間くらいなので、ヘルシンガーの海沿いは高級住宅地になっているそうだ。小さいけれども藁葺き屋根のシャレた家々もみられた。浜辺には海水浴をしている人も結構いて、トップレスの女性（おばさん）もいたが、夏休みが終わっているので人出は少なめとのことであった。

ヘルシンガーのヘルスは首で、シンガーは耳という意味で、首と耳のように出っ張った形が名前の由来という。コペンハーゲンから電車で50分、スウェーデン（ヘルシンボリ）にも20分で行くフェリーが出ている。駅とフェリーターミナルを過ぎ、第2次大戦時にドイツに占領されたデンマークから中立国のスウェーデンにユダヤ人を逃がしたことを称える碑を見て、バスはクロンボー城に到着した。



この城はシェークスピアの『ハムレット』の舞台として知られ、門をくぐって少し行くと、シェークスピアの胸像のレリーフがあった。その下に王子ハムレットについての記述があり、“AMLETH 王子”と記載されていたが、最後のHを頭に廻して HAMLET にしたという。一種のアナグラムなのであろう。僕は、シェークスピアと言ったらむしろ『恋におちたシェークスピア』を思い出してしまう。“You are never age …for me. No fade …no die”というバイオラとシェークスピアとの最後のシーンがとっても印象深く残っている。福島さんに話すと、やはりあの映画は良かったと言っていた。

僕もあんなセリフ言ってみたかったな！（爆笑）

15世紀に造られたこの城は、海峡通行税を徴収するために設けられ、灯台も兼ねていたという。通行税を払わない船には容赦なく大砲が浴びせ掛けられたというが、現在も旧式の大砲が海に向かって威嚇している姿をみることができた。しかし、当時の大砲では精々1キロくらいまでしか届かず、この海峡は4

キロあるので、すり抜けた船も多くあったことであろう。

城の2階に上がると、まずは3枚の肖像画が目に入った。1枚目は海峡税を制定したエリック7世、続いて城を再建し、シェークスピア時代の王であったフレデリック2世、そして焼失した城を修復したクリスチャン4世のものであった。クリスチャン4世の母親の実家はヨーロッパ唯一のお金持ちであり、その財力にものを言わせて、この城をルネッサンス様式にし、また、多くの戦争もしたとのことである。この城の所々にC4のマークが見られたが、これはクリスチャン4世のマークということであった。

最も寒かった冬に海峡が凍結し、そこを渡ってスウェーデンが攻めてきて、大理石をはじめ中庭の噴水まで、目ぼしいものをことごとく持ち去ってしまったために、内部は寂しい感じがした。王様の居間からは、先ほどわれわれが入ってきたシェークスピアのレリーフがあった門が見え、来客が誰であるのかをすぐに確認することができるようになっていた。スペイン王室のラペグルリーナという真珠のネックレスは現在エリザベス・テラーが所有しており、また、女王の間は寒いときには、窓にゴブラン織のタペストリーを掛けて寒を防いだそうだ。

3階の女王のギャラリーには、マルガレーテ1世の王妃の絵があり、大きなホールに続いていた。次に、7枚のゴブラン織が飾られた **Little Hall** という部屋に入ったが、12、13、14世紀の国王が織られていた。青いゴブラン織は染料が高いため高価なのだそうだ。天体儀の中にはカシオペア新星を発見し、後にケプラーの師となったデンマークの天文学者チコ・ブラーエの顔が描かれていた。そう言えばホテル前のプラネタリウムの中には「カシオペア」というレストランのネーム・ボードが出ていたが、チコ・ブラーエに因んでるんだなあ、と納得してしまった。また、**FREDERICK V's CHAMBER** という部屋には、漆塗りの家具や陶磁器など東洋からのものが展示されていた。続いて、**THE MARSHAL'S HALL** には家具やタペストリーが、**THE DUCHESS OF MECKLENBURG'S CHAMBER** には、デンマークが未来永劫まで栄えるようにというイメージの大きな絵が掛けられていた。続けざまにいろいろと廻ったので、正直、何だかわからなくなってしまった。

最後に、フレデリック2世のときに作られた城内の教会に入った。白黒の大理石と天井の飾りが美しくて印象的だった。スウェーデンの兵士は、流石に教会のものには手を出さなかったのだろう。中庭の広場には舞台が設けられていたが、フィリピンだかシンガポールのハムレットが上演されるのだそうだ。15時35分に集合して、クロンボー城を後にした。

少し行くと、三菱モーターのデンマーク本社を左に見て、その後はのどかな田園地帯と木々が続く中を進んで、16時過ぎにフレデリクスボー城に到着した。

駐車場からブナ林の道を歩いて進むと、目の前に壮麗な城が姿を現わした。手前の庭園や周囲の湖の美しさもあって、クロンボー城よりも数段美しく思えた。クロンボー城と同様、この城もフレデリック 2 世が着手して、クリスチャン 4 世がルネッサンス様式で完成させたという。1859 年の火災でほとんど焼失してしまったものを、カールスバーグ・ビールの 2 代目社長カール・ヤコブセンらの寄附によって再建されたのだそうだ。この社長は人魚の像の建造にも関わったともいうから、すごい慈善事業家であったのだなあ、と思わず感心してしまった。(アサヒや麒麟の社長も何かスゴイ貢献をして欲しい！)

この城は 3 つの島に渡っており、われわれは王の居城であった 3 の島から進んだ。正面から見るとちょっとカナダのホテルっぽい感じであったが、2 の島に渡って、振り返ってこの城を眺めると、ルネッサンス様式の建物にバロック様式で造られた謁見の間が付け足され **Splendid** であった。また、クロンボー城にあった噴水を模して造られたというネプチューンの噴水も、壮麗な城のバックグラウンドに映えていた。橋を渡って 1 の島に移動すると、レンガの厚みについて説明があった。レンガって結構厚いものなんだと感じたが、太田さんがカメラを落として壊してしまったところで、現実に戻された感じであった。



(壮麗なフレデリクスボー城)

17 時過ぎに出発し、途中、風力発電の風車を見ながら進んだ。高速道路の制限速度は乗用車が 110km、バスは 80km などの説明を聞きながらホテルに戻った。戻るや否やクロンボー城で買った絵ハガキを書き、切手を買いに出了かけた。僕は黄色い看板の Netto に出かけてみたが、食料品以外、特に目ぼしいものはなかった。カメラの安売り専門店でフィルムを購入すると、先ほどクロンボー城のスタンドで陽ちゃんが買った半額くらいで買え、観光地がボツているのは日本と同じだなと思った。それに、あの店で切手を買おうと思ったら、“うちで絵ハガキを買わないとダメ”と断られてしまったのにも、改めて腹がたった。ホテルに戻る途中、街中で福島さんに会った。

暑いので気が進まなかったが、ジャケットを着て夕食に出かけた。福島さんに従ってゾロゾロと歩いて出かけ、チボリ公園に入ったが、公園内でも随分と

歩かされた。チボリ内には 26 のアメニティと 37 ものレストランがあり、金曜の夜と言うことで混雑していた。われわれのレストランは高級感があり、料理も美味しかった。ツアーの中に 8 月 14 日に誕生日の方がいらして、そのお祝いもあり、先ほど福島さんに会ったのは、そのプレゼントを買いに出かけたとのことであった。

チボリ公園ではジェットコースターに乗ってみよう！ と思っていたので、食後、成瀬さんと陽ちゃんとともに、さっそくトライした。思ったほどでもなかったが、隣に座ったファッティーな女性の圧力が凄まじかった。また、イッツア・スモールワールドのような乗り物にも乗ったが、内部の人形が雑であり、何となくしらけた感じだった。どうしてもディズニーランドと比べてしまうが、射撃とか的当てとか、チボリの方は縁日的なものも随分あり、ずっと経費がかからないだろうと思われた。

金・土は深夜 1 時まで開園しているということだが、コンサートか何かが始まって、夜が更けるにつれて一層にぎやかさを増していくように思えた。そんな中、出口がわからなくなって行ったり来たりしてしまったが、11 時過ぎにはホテルに戻った（陽ちゃんはずっと乗り物に乗りたがっているようであった）。

8 月 17 日（土） 晴れ

いよいよ最終日になってしまった。

9 時にホテルを出発して、礒部先生とロイヤルコペンハーゲンの工場に行ってみた。土曜なので工場は休みだったが、ショップは開いていて、すでに何人かが訪れていた。色が濃すぎたり、薄かったり、ムラがあつたりするのが B 級品で、飾り気もなく並べられたり、積み上げられたりしている高級陶磁器を見るのも楽しかった。いろいろ吟味した末に、お皿を数枚購入した。

続いてバスでストロイエに向かった。市庁舎前広場のセブンイレブンとバーガーキングの間から入り、活気のある通りをブラブラと歩いた。ロイヤルコペンハーゲンの本店では美しく飾られた商品を見たが、それらは工場のショップとは随分と異なり高級感に溢れていた。

昼食用にマックでテイクアウトして、11 時 40 分にホテルに戻った。荷物を整理してチェックアウトした後は、ホテル前の湖畔で礒部先生や成瀬さんたちとくつろいで過ごした。湖畔を渡る風は爽快であり、夏の北欧にいる実感があつた。顔だけが白い黒鳥が『千と千尋の神隠し』の“顔なし”に似ていて面白かった。また、陽ちゃんが地元の若者にナンパされたのも、おかしかった。

13 時 19 分にバスは出発し、出国に関する注意などがあつたが、ラッセには日本に来たときには連絡するよう、連絡先を覚えておいた。



(ホテルの前の湖畔は爽快でした)

SK983 便は 16 時過ぎに離陸した。本来 1 番前であった座席を十束先生とチェンジしたところ、僕の後ろに磯部先生、その脇はなんと、行きのフライトで僕の隣だった眼科の先生であった。われわれの観光しなかったスポットや老健施設の話などについて伺うことができた。僕の隣席は大柄な外人で、彼がちょっと動くと椅子が揺れて、**uncomfortable** であった。

8 月 18 日 (日) 曇り

機内放送では成田は雨とのことであったが、すでに上がっており、9 時 55 分に着陸したが、思いのほか涼しく感じられた。カルーセルで皆さんにお別れを言って出ると、渡里さんがフジテレビのインタビューを受けていた。今日が帰国のピークなのであろう。

10 時 48 分のスカイライナーに乗り、12 時過ぎの帰宅となった。

あとがき

7～8 年前の 6 月初め、コペンハーゲンに留学中の Y 助教授から、勉強も兼ねて、1 週間ほど遊びに来るようにとの FAX を頂いた。残念ながら、忙しさにまぎれて実現できず、以来、北欧は近々訪れてみたいと考えていた。

梅雨明けから延々と続く今年の厳しい暑さによって、一足早い夏バテを感じていたが、“北欧の爽やかな風に吹かれない!” という思いで何とか乗り切って旅行に臨んだ。そんな経緯から、それをそのままタイトルとした。

いつものように、怪しげな記憶力をベースに、自分でも読めないような走り書きのメモから、この旅行記を書いてみたが、通常なら 1 週間程度で終わるのが、特に今回はデジカメ画像を取り入れたため、ちょっと時間が掛かってしまった。とにかく、これを書き上げないと、僕の旅行は終了しないので、次第に気合が入ってしまい長編になってしまった。

この北欧旅行を咀嚼し直したことで、フィヨルドの深さにも劣らない印象深い旅行になったような気がする。それにしても、今年は残暑が厳しい…。

平成 14 年 8 月 31 日

鹿島 健司